

會員の頁

第25卷第2號 昭和14年2月

治山治水と國民教育

會員 猶原 恭爾*

國土が狭く、地勢が峻峻な我國に於て國家の總資源がよく開發される爲に、且又頻繁に起る風水害等を防止する爲には學術と經驗に基づく土木技術が大いに活用されなくてはならぬ。

經國済民を念とする眞の爲政者は古來災害を防止し殖産を促す土木に大いに意を注いでゐる。最近頻々として起る大風水害に刺戟されて、爲政者に治水事業の擴充促進に關して狼狽の色があるやに見え、他方今日まで技術者が兎角等閑にされつゝ苦闘して來たことは經國済民に土木が如何に重要であるかの認識を爲政者が幾分缺いてゐた爲であると考へざるを得ない。

今や我國は大陸に發展し、大陸を開發せんとする時に、爲政者が土木に關する今日までの如き認識を以て土木技術を待つこと切なる大陸に臨むならば、土木技術者は勿論、技術者ならざる筆者と雖も危惧の念を持たざるを得ない。

常時の殖産に、災害時の災害防止に治山治水が國民生活に緊密なる關係があることは今更言ふまでもないことであるが、國民一般が果して治山治水の重要性とその恩恵をよく認めてゐるであらうか。近い過去に於て慘害を蒙つた住民は切實に感ずるであらうが、夫も40年を過ぎたならば、喉元過ぎた熱さの如く忘れ果てられ、治山治水の恩恵を直接受けてゐる筈の住民と雖も兎角その重大さと恩恵を輕視し或は忘れ勝ちのものである。

斯くて治山治水工事に従事する人が附近住民の惡意には基づかざるも唯無知無理解の爲に工事を妨げられ、或は河川山林の愛護思想を缺如せる爲に防止し得る災害を招來し、慘害を増大してゐる。

先年來小学校國語讀本の改訂が行はれ、昭和13年秋第12巻が出来上つて全巻の改訂が終つた。その全巻を通覽するに、土木に關する教材は極めて乏しく、

就中治山治水に關聯するものは絶無である。僅かに土木に關するものとしては卷10に「パナマ運河」卷8に「清水トンネル」が掲載されてゐるに過ぎない。「パナマ運河」には運河の機構、工事の困難、黃熱病征服によつて工事が進捗したことが説明され、「清水トンネル」には早春東京を出發して北行するに従ひ次第に氣候、風物が変わり、トンネルを境にして更に相違することを説明し、併せてトンネルの有様を記してある。

(改訂前の讀本卷12には「青の洞門」があり、之には豊前中津の山國川の断崖に享保の頃越後の人禪海が初めの内は附近住民の嘲笑を浴び乍ら30年の年月を費して100間餘のトンネルを開いたことを説明してあつた。)

要するに現今の國民教育に於ては治山治水と言ふ我國情に於てはゆるがせにすべからざる事項が全く教へられてゐないのである。

國民全体に治山治水が災に際して災害を防止し、平時に於ては殖産を促して如何に福祉を増進してゐるかを理解せしめ、山林を愛し、河川を護る風を習はしめ、又風水害等の災害に際して如何なる對策を採るべきかを教へ、併せて天姿地異のみならず、戦時の空襲等の異常時に際してもよく毅然たる心構へを持つ訓練を與へ、更に治國安民を念とする爲政者は災害を防止し、殖産を興す土木に大なる努力を拂ふものであることを教へる爲に適當の教材を小学校と青年学校に取り入れなくてはならない。感受性の強い少年時代に國語讀本より得たる幾多の知識が如何に感銘深いものであり、成人後の見聞の多くが實に淺薄な印象を留めるに過ぎないものであるかを想起する時、治山治水に關する知識を國民の常識とすべき國情の下に於ては先づ國民教育に適當な教材が取り入れられるべきだと思ふ。

* 理学士 東京府豊島師範学校教諭